

その歴史は古く、卒業翌年の昭和40年の伊豆長岡温泉旅行を皮切りに年一回の旅行、年二回の都内での会食を続けてきた。
しかし、当番幹事の転勤等でご数年は会も途絶えていたが、同期の多田光宏氏(B.H.)が昭和62年に死去、その葬儀の際に、会再開の気運が高まってきた。が再開を具体化する迄には至らなかった。



そこに今回の阪神大震災。神戸には我々の同期の岩田昭治氏(Boss.)がいる。会員皆心配していたが、連絡を取り合つうちに、急遽集まる事で話がまとまり、平成7年2月24日、新橋で久しぶりに「たちね会」を開催した。当日は連絡が急だった事もあり、都内および近隣の8名が集まり、お互いの頭と腹を見てそれぞれ安心?納得していた様子。

そこで無理の無いところで年一回会を持つ事で一致、次回を平成7年12月9日に決めた散会した。

我が「音楽歴」



川合高徳
明治大学文学部教授
経営音楽クラブ部長
交友会名誉会員

前口上
原稿のご依頼を受けましたので、自己紹介の代わりに、小学生のささやかな音楽遍歴(と申すのも、おこがましい程度のもの)を記して、貴を果たしたいと思えます。

第一章

物心ついたのが、太平洋戦争の真つ中で、世の中、音楽どころのご時勢ではなかったのですが、ラチオ(確か当時はこう書いたと思います)から「お山の杉の子」という歌が、男声と女声の掛け合いで、よく流れていました。これが思い出せる限り最古の音楽的記憶です。(余談ですが、その頃のラチオには、アンテナ線とアース線というものが必ずついていておりました。それに因って今でも不思議なのは居間の窓から地中に伸びているそのアース用の針金を、昼間避んでいる時に、いたずらして指でピンとはじくと、その晩、家でラチオを聞いている時、必ずギヤーツと雑音が入るので、二度はじけば二度入る。三度以上は、遠慮して試みませんでしたが、あれは単なる偶然だったのか、今もって不思議です)。

第二章

さて終戦後、住宅事情の逼迫

から、さる老声楽家女史が一つ屋根の下に住む事となりました。この人が面口半分にか、退屈しのぎにか、幼き小生に英才教育と称して音階練習を施したのです。彼女がオルガンでドミソ、ドファラ、シレソ(だったかな)のどれかを弾く。こちらは、それに合わせて「ドオミイソ」とか歌うわけです。これがまあ苦痛以外の何物でもなく、しかもどの音階も何度聞いても、多少音の高低はあれども、結局みなドミソと聞かえるのであります。それで、どの音階が来ようが「ドオミイソ」とか歌うわけですが、なぜか「みい」の部分が一番高くなつて、しまう。つまり今思えば、ドレドの音程でドミソと発声していた訳です。そんな次第で、たちまち女史の音感教育は頓挫し、おかげで魔のドミソからは解放されたのですが、こちらはすつかり音楽嫌悪症に陥るとともに、自分には音感というものが完全に欠如しているのだという、深い挫折感を生じ心に味わつたのであります。(ご依頼の紙幅を早くも越えてしまいましたので、以下はまたの機会に譲りたいと思います)



根本孝
明治大学経営学部教授
B.S.S.O.部長
交友会名誉会員

オランダとジャズ

ジャズといえはアメリカ、そしてニューヨークでしょうが、

そしてお好みのあの店とか。しかし上海のジャズもなかなか粋な響き、もちろんヨーロッパも捨てたものではございませんよ。そしてヨーロッパの田舎、小国オランダのジャズも見くびらないでください。ジャズ界の大家物が勢揃いする世界ジャズフェスティバルも毎年開催されているのはご存じの方もおられるでしょう。しかし毎年日本のバンドが最優秀賞の榮譽に輝き続けているマーストリヒトのフェスティバルはご存じの方は少ないでしょう。マーストリヒトといえはあのE.C.統合のマーストリヒト条約の締結がなされた地なのです。そして、ここで開催される音楽フェスティバルは参加バンドすべてが最優秀賞を獲得する、平和なフェスティバルなのです。世界一の貿易港、ロッテルダム港に千人のドラマーが集まり、野外のステージでドラムの競演を繰り広げるといふジャズフェスティバルも真夏に開催されます。それはもう、ものすごい迫力というか、花火の音、番の音どころか、爆弾の音というか、まさに「真夏の夜の夢」の音なのです。(経営学部で国際経営論を担当しておりますが、こんな研究もしております。とりわけオランダにかぶれ、エッセイ集の「オランダ豊かさ事情」「オランダ生活物語」(同文館発行)も出版し、現在3作目を執筆中です)。

相続の相談・会社の設立
清谷卓司税理士事務所

〒233 横浜市港南区日野中央三丁目42番5号
TEL.045-(831)8325 FAX.045(831)3546